シグナルライン

【登場人物表】

川西朝紀（22）無職

川西香夜（17）高校2年生朝紀の妹

川西直紀（50）朝紀の父親

川西香穂（46）朝紀の母親

山下隆一（22）朝紀の高校時代の同級生

山下凪沙（17）香夜の幼馴染

伊藤海（22）朝紀の高校時代の同級生

ハローワークの男性（48）

朝紀の会社の上司（38）

ハローワークの受付女性（32）

○会社からの道（夜）

会社から出てくる川西朝紀（２２）

横断歩道を渡ろうとした瞬間、信号が赤になり

立ち止まる朝紀。

朝紀M「東京って、外から見ると輝いて見える」

朝紀「あー何やってんだろう俺」

赤信号を見る朝紀。

朝紀「人生、止まれってことかな」

○朝紀の家・リビング（夜）

家に入る前に顔をつくる朝紀。

鍵を開け部屋に入る。

朝紀「ただいまー」

香夜「朝紀、おかえり」

先に家に帰っていた妹の川西香夜（１７）

朝紀「お前、帰ってたのか」

香夜「お前って言わないで」

朝紀「香夜ちゃん、帰ってたんですか？」

ふざけて喋りかける朝紀。

香夜「キモい。カップルかよ」

朝紀「兄貴に対して口悪いぞ、香夜」

香夜「キモいよりはマシだね」

朝紀「確かに……って納得してる場合じゃないか」

香夜「どうしたの？って聞いてほしい？」

朝紀「いちいちだな、お前ほんといちいちだな」

再びお前と言った朝紀を睨む香夜。

長い沈黙。

朝紀「……ごめん」

香夜「辞めたの？会社」

朝紀「え、う、うん」

香夜「そっか」

朝紀「えっ！それだけ？」

香夜「えっ？何か言って欲しい？」

朝紀「いや、そうじゃないけど、もっと驚かれると思って」

香夜「毎日、辞めたいって顔面に書いてあったからね。私にとっては、いつかくるその日が、今日だったってだけだし」

冷静な香夜に驚く朝紀。

香夜「サプライズするなら、もっと分からないようにしなよ」

朝紀「なんのアドバイスだよ」

香夜「会社辞めたって死ぬわけじゃないし。大丈夫だよ」

朝紀「……」

香夜「何が大丈夫かは分からないけど、大丈夫」

思いがけず涙が溢れそうになる朝紀。

それに気づきながらも何も言わない香夜。

朝紀「あれ？俺ってこんなに弱かったっけ」
香夜「弱くないよ。真面目すぎるだけだよ」
立ち上がり朝紀の背中を強く叩く香夜
香夜「ご飯食べよ、出前でもとる？」
朝紀「切り替え早いよ」
香夜「こういう時こそ、美味しいもの食べた方がいいんだよ」
朝紀「そういうものなの？」
香夜「そういうものだよ」
笑いかける香夜。

○回想／会社・デスク（朝）
一人デスクに座りパソコンの画面を見つめる朝紀。
メール画面の更新ボタンを押すが、新しいメールは来ていない。
朝紀の退屈さとは裏腹に、忙しそうにしている先輩たち。

○公園
ベンチに座り空を見ている朝紀
その横に座る、同級生の山本隆一（２２）
朝紀「おお、隆」
隆一「何してるの？」

朝紀「空見てる」

隆一「気持ちいい？」

朝紀「気持ちいいよ。空って広いんだなとか思ったりして」

隆一「いつも広いだろ？」

朝紀「さっき気づいたよ」

隆一「重症だな」

朝紀「俺って、重症なの？」

隆一「外から見ると重症に見えるよ」

朝紀「そうなの？」

隆一「そうだよ。外から見た方が物事って分かりやすいんだよ」

○回想／居酒屋（夜）

優しく受け止めながら話を聞く隆一。

朝紀「俺って甘いのかな？」

隆一「辛くはないな」

朝紀「そういう話じゃないよ」

隆一「わかってるよ。朝紀は甘くないよ」

朝紀「まだ、何も話してないだろ？」

隆一「何を話すのかは分からないけど、甘くないのはわかる」

朝紀「なんだよそれ……」

隆一「友達ってそういうものだよ。苦しい時は苦しいって言えよ」

朝紀「！」

恐る恐る、言葉を発する朝紀。

朝紀「あのさ」

隆一「ん？」

朝紀「俺、仕事辞めようと思ってて……」

朝紀の目を真っ直ぐに見つめる隆一。

隆一「そっか、お疲れ様」

朝紀「それだけ？」

隆一「それだけだよ」

○公園

隆一「あの時は朝紀のしんどさはさ、朝紀にしか分からないから、適当なことは言えないと思ってたけど、ちゃんと苦しそうだったよ」

朝紀「ちゃんとってなんだよ」

ゆっくり時間が流れる公園。

朝紀「仕事辞めたの、やっぱり早かったかな？」

隆一「まあ、普通に考えたらな。でもそれって誰が決めたんだよ」

朝紀「……」

隆一「俺からしたら、辞めるって選択をちゃんと自分の意思でした朝紀はよく頑張ったと思うよ」

朝紀「……隆って、そんなに優しかったっけ？」
隆一「身近な人には優しいんだよ。日頃から、もっと俺の言葉を噛み締めろ」
朝紀「うるせぇ」
照れ隠しのように笑う朝紀。

○家への帰り道（夕）
公園から家に帰る朝紀。
渡ろうとした横断歩道の信号が赤になる。
立ち止まる朝紀。

○回想／会社（朝）
直属の上司（３８）に話しかける朝紀。
朝紀「今日から、よろしくお願いします」
上司「うん、よろしくね」
パソコンの画面を見続け一度も朝紀の顔を見ない上司。
朝紀「えっと、何をすればいいですか？」
上司「うーん、じゃあ、そこ掃除しといて」
上司が指差す方向には大量の紙の山とシュレッター。
上司「紙、全部シュレッターにかけといて」
朝紀「分かりました！」
一時間もかからず終える朝紀。

パソコンの画面を威圧的に見る上司。

朝紀「終わりました！」

朝紀の顔を一切見ない上司。

上司「じゃあ、次は……」

辺りを見渡す上司。

上司「シュレッターのゴミ捨てといて、それと、そこも掃除しといて」

朝紀「はい、分かりました！」

再び掃除を終える朝紀。

朝紀「終わりました！」

上司「じゃあ、次はそこ」

次の掃除場所を指差す上司。

朝紀「分かりました」

一つ一つ丁寧に言われたことをこなす朝紀。

朝紀「終わりました」

上司「そこら辺また掃除しといて」

朝喜「分かりました……」

掃除を続け、定時を迎える。

時計に気づく朝紀。

朝紀「あ、あの……」

時計を見る上司。

上司「定時か、お疲れ様」

一切、朝紀の顔を見ない上司

朝紀「お先に失礼します。お疲れ様でした」

会社を出る朝紀。

○家への帰り道（夜）

家までの道のりを歩く朝紀。

○朝紀の家・リビング（夜）

朝紀「ただいま」

香夜「おかえっ、何その顔？」

朝紀「え？」

香夜「変な顔」

朝紀「はー？それが帰ってきた兄貴に言うことか？」

香夜「声でかっ！」

朝紀「声もでかくなるわ」

香夜「そんなことよりもさ」

朝紀「全然そんなことじゃないけどね」

香夜「コンビニ行きたいんだけど、暇でしょ？護衛としてついてきて」

朝紀「誰に命狙われてるんだよ」

香夜「この世界のすべての男？」

朝紀「聞くなよ」

香夜「行こう。夜のコンビニは楽しいよ」

無邪気に笑う香夜。

言われるがまま、ついていく朝紀。

○コンビニ（夜）

コンビニに入った瞬間真っ先に陳列されている
アイスを見に行く香夜。

香夜「見て！これ新しいアイスだよ！」

朝紀「そうなの？」

香夜「うん、だって先週来た時なかったよ」

朝紀「そうなんだ」

香夜「コンビニ来ていつも何を見てるの？」

朝紀「弁当だよ」

香夜「つまんない男だね」

朝紀「なんだ、その喋り方」

香夜「アイス食べずに生きるの辛いでしょ？」

朝紀「大袈裟だな」

香夜「これと、これ！あとこれも買おう」

沢山のアイスを指差していく香夜。

朝紀「こんなに食べるの？」

香夜「今の朝紀にはこれぐらい必要だよ」

朝紀「自分で食べるくせに」

香夜「半分はね」

沢山のアイスがカゴに入る。

香夜「あと、あれ食べて帰ろう」

香夜が指差す先にはホットスナックコーナー。

○家への帰り道（夜）

歩きながらコロッケを食べる朝紀と香夜。

朝紀「美味いな」

香夜「でしょ？いつも学校からの帰り道に食べてるんだ」

朝紀「知らなかった」

香夜「あったかくて、ちょっとだけ懐かしくて美味しいんだよ」

再びコロッケを食べる朝紀。

朝喜「ほんとだ」

香夜「でしょ？」

嬉しそうにコロッケを食べる香夜。

朝紀「……ありがとう」

何も言わずコロッケを食べ続ける香夜。

朝紀「俺、帰ってきた時、どんな顔してた？」

香夜「こんな顔」

手を使い変な顔をする香夜。

朝紀「なんだよ、その顔」

香夜「本当にこんな顔してたからね」

朝紀「え、本当に？」

香夜「家族だから何でも分かるとか言うけどさ」

朝紀「？」

香夜「結局は人と人だから分からないことの方が多いし、言ってくれないと気づかないけど、毎日顔を合わせているとさ、気づいちゃうんだよね」

朝紀「本当に、あれだけ変な顔だったらな」
香夜「違うよ。大丈夫な顔の時とそうじゃない時の顔」
朝紀「！」
香夜「ほんの少しの違和感を感じちゃうんだよ」
朝紀「心配してくれてた？」
香夜「心配っていうか……違和感だから」
素直になれない香夜。
朝紀「違和感って大事なんだな」
香夜「言葉にできない、違和感って侮れないよ？」
朝紀「……」
深く深呼吸する香夜。
香夜「夜の空気って美味しいね」
朝紀「味するの？」
香夜「朝紀には、まだ分かんないかー」
朝紀「分かるようになる？」
香夜「もう少ししたら分かるよ」
二人揃って、深呼吸をする。
満足そうな香夜。
匂いが分からず何度も嗅ぐ朝紀。
香夜「あ！」
朝紀「なに？夜の大声怖いんだけど」
月を指差す香夜。
香夜「月が綺麗だね」

朝紀「それ、俺に言うやつじゃないよ」

香夜「え、何が？」

朝紀「ちゃんと学校で勉強しろよ」

香夜「？」

○朝紀の家・玄関（朝／日替わり）

玄関で靴を履く朝紀。

香夜「どこ行くの？」

朝紀「ハローワーク」

香夜「いってらっしゃい」

朝紀「ちゃんと学校行けよ」

○電車・ホーム（朝）

スーツ姿の人たちが電車から忙しなく降りてくる。

入れ違いでガラガラになった電車に乗る朝紀。

○電車・車内（朝）

電車に揺られながらボーッと外を眺める朝紀。

○ハローワーク（朝）

初めて行くハローワークに、少し緊張気味の朝紀。

見渡すと老若男女、沢山の人がいる。

受付に行く朝紀。

朝紀「あのー、初めて来たんですが……」

受付「では、あちらの紙に詳細をお書きください」

朝紀「はい、わかりました。ありがとうございます」

右も左も分からないハローワークにあたふたしながら、手続きを進める朝紀

○学校・教室

自分の席に座りお弁当を食べる香夜。

その向かいに座り一緒にお弁当を食べる幼馴染の山下凪沙（17）

凪沙「朝紀どう？」

香夜「なんでいつも呼び捨て？」

凪沙「よく小さい頃、一緒に遊んだなー」

香夜「聞いてないし」

凪沙「四人でキャンプとか行ってさ」

香夜「私が怪我したときね」

凪沙「そう、それ！香夜がぐちゃぐちゃに泣いてたとき」

香夜「ぐちゃぐちゃだったけ？」

とぼける香夜。

凪沙「朝紀が何とか笑わそうと頑張ってて」

香夜「また聞いてないし」

凪沙「でも、香夜全然泣き止まなくて」

香夜「え？私、すぐ笑ってたでしょ？」
凪沙「笑ってたけど、同じぐらい泣いてたよ？」
香夜「そうだっけ？」
凪沙「あの時さ怪我してる香夜見て、朝紀泣いてたんだよね」
香夜「よく覚えてるね」
凪沙「キャンプ楽しかったからさ」
香夜「うん、楽しかったのは覚えてる」
凪沙「香夜にバレないように必死だったと思うよ」
香夜「見たかったなー」
凪沙「今、思うと貴重な涙だったね」
香夜「確かに……いや、最近見たな」
凪沙「？」
香夜「泣いてるの」
凪沙「それ、何泣き？」
香夜「分からない。悔しいのか、悲しいのか、嬉しいのか」
凪沙「家族でも、そういうものなの？」
香夜「そういうもんじゃない？しんどさとか辛さは、その人しか分からないからさ」
凪沙「……」
香夜「……」
凪沙「あ！」
香夜「えっ！何？」

凪沙「朝紀がキャンプのとき泣いてたのって、香夜の痛みが分からなかったからじゃない？」

香夜「あーかもしれない。分からないって泣くほど苦しいんだね」

○ハローワーク・デスク

最後の手続きのためハローワークの男性（48）と対面で手続きを進める朝紀。

男性「では、これで手続きは終了となります。次回はこの記載されている日に来てください」

書類をまとめる男性。

あたりを見渡す朝紀。

男性「どうかしましたか？」

朝紀「いや、若い人も結構いるんですね」

男性「あなたも、十分お若いですよ？」

朝紀「そうですか？」

男性「はい」

書類を置き朝紀の顔を見て話す男性。

男性「確かに、少し前よりは若い人が増えた印象があります」

朝紀「正しい感情かどうか分からないけど、同じような人がいるだけで、少し安心するんですよね」

男性「良いことかは分かりませんが……」

朝紀「？」

男性「若い人が、ここにいることは別に悪いことじゃないですよ」

朝紀「え？」

男性「皆さん自分の人生にちゃんと向き合おうとして来られます。それって思っている以上に体力を使うと僕は思うんですよね」

朝紀「……」

男性「たぶん、計り知れないほどの。だから、少しずつ焦らずやっていきましょうね」

出来た書類を渡す男性。

朝紀「ありがとうございます」

書類を受け取る朝紀。

朝紀「ここに来て良かったです」

頭を下げ立ち去る朝紀。

その背中に言葉をかける男性。

男性「この時間を大切にして下さい」

少し明るくなった表情でハローワークを出る朝紀。

○学校からの帰り道（夕）

いつもよりゆっくり歩いて帰る香夜。

香夜の携帯が鳴る。

画面には「お母さん」の文字。

電話に出る香夜。

香夜「もしもし、どうしたの？。朝紀？一応、元気だよ。会社辞めた日は結構……ん？えっ！」

○電車・ホーム（夕）

手元には渡された書類。

朝紀の携帯電話が鳴る。

画面には「香夜」の文字。

朝紀「香夜？どうした？」

ホームに電車がくる。

朝紀「電車来たから切るよ？」

電話を切ろうとするが香夜が喋り続けている。

朝紀「？」

気になり再び電話に耳を傾ける朝紀。

朝紀「……え？ほんと？ヤバいじゃん！」

手に持っているハローワークの書類が目に入る。

○学校からの帰り道（夕）

香夜「とりあえず、実家集合で」

電話を切り走り出す香夜。

○電車・ホーム（夕）

朝紀「わ、わかった！」

電話を切って、逆のホームへ走り出す朝紀。

朝紀「やばい、やばい、やばい！」

○茨城の実家・玄関（夜）

朝紀の帰りを玄関で待っていた香夜。

香夜「遅いよ！」

朝紀「ごめん、ごめん」

肩で息をしている朝紀。

朝紀「茨城って近いのか遠いのか分かんないな」

香夜「どっちでもいいよ！」

大きな声を出してしまう香夜。

朝紀「しーっ！」

香夜「！」

朝紀に近づく香夜。

リビングにいる両親に聞こえないように小声で話し始める二人。

香夜「なんで、お母さんに会社辞めたこと言ってなかったの？」

朝紀「次の仕事、決まってから言おうと思って……」

香夜「言っちゃったよ？」

朝紀「打ち合わせ不足だな」

香夜「何で冷静？」

朝紀「もう、言うしか選択肢がないからな」

香夜「その調子なら大丈夫だね」

朝紀「え？」

香夜「お兄ちゃん、頑張ってね」

朝紀の背中をポンと押す香夜。

○同・リビング（夜）

リビングに繋がるドアを開ける朝紀。

朝紀の帰りを待ち構えていた母・川西香穂（46）と父・川西直紀（50）

香穂「朝紀、おかえり」

朝紀「ただいま」

香穂「そこに座って」

朝紀「……はい」

両親と対面に座る朝紀。

香穂「香夜から聞いたよ。仕事やめたんだって？」

朝紀「……うん」

香穂「お金はあるの？」

朝紀「まだ貯金がある」

香穂「そう」

朝紀「……」

香穂「……」

長い沈黙が続く。

直紀「何で、辞めてすぐ言わなかったんだ？」

朝紀「心配かけたくなくて。次の仕事決まってから連絡しようと……」

香穂「はーぁー」

大きく息を吐く香穂。
香穂を伺う朝紀と香夜。
香穂「朝紀！」
朝紀「はい！」
香夜「！」
香穂「親はね、たとえ子供たちが家に居なくても何も変わらないの。分かる？」
朝紀・香夜「？」
香穂「見えなくても、すぐに声が聞こえなくても、それが社会に出たとしても変わらず、ずっと心配で」
朝紀「！」
香穂「だから、どれだけ朝紀が心配かけないようにしても、意味がないの」
直紀「……」
香穂「だから、どういう人生を送っているかだけでも、ちゃんと教えてほしい」
朝紀「はい」
香穂「言ってること分かるよね？頼むよ。お兄ちゃん」
優しい目で朝紀を見る3人。
香穂「よっし！ご飯、食べよっか」
立ち上がり台所に向かう香穂。
香穂「何食べたい？」
香夜「私、オムライス食べたいな」

台所に向かう二人。
朝紀の背中をそっとさする直紀。

○同・台所（夜）
食べた食器を片付ける香夜と香穂。
香穂「香夜、ありがとうね。朝紀のこと」
香夜「何もしてないよ」
香穂「近くに居てくれてありがとう」

○同・縁側（夜）
お酒を飲む朝紀と直紀。
朝紀「父さん、ごめんね」
直紀「さっきから、謝ってばっかりだな」
朝紀「……」
直紀「自分の人生なんだから、もっと自由に生きていいんだぞ」
朝紀「自由って難しいよ。俺さ、入社するとき不安な気持ちもあったけど、少し楽しみでもあってさ」
直紀「うん」
朝紀「これから、人の役に立てるんだーって」
直紀「そうか」
朝紀「今思うと楽観的だったなって」
直紀「それって悪いことじゃないだろ」

朝紀「入社して二週間ぐらいかな？ずっと仕事教えてもらえなくて」

○回想／会社（朝）

社内に入る前に気合いを入れる朝紀。

朝紀「よしっ！」

扉を開け入る朝紀。

どんよりした空気が流れ込む社内。

それでも、元気よく挨拶する朝紀。

朝紀「おはようございます！」

上司「おはよう」

朝紀の顔を見ない上司。

朝紀N「今日は何かが違うかも。何かが変わっているかもって思いながら毎日行って」

いつもと変わらず掃除を続ける朝紀。

朝紀N「変わってないことに馴染めてないことに、また勝手に傷ついて」

朝紀「何やってんだろう。俺……」

周りを見渡すが、朝紀以外は忙しなく動いている。

デスクに座りメールの更新ボタンを押す朝紀。

パソコン画面「新着メールはありません」の文字。

時間はまだ十時。

上司のデスクに行く朝紀。

朝紀「何か、手伝えることありますか？」

上司「えーと、メールの対応しといて」

朝紀「……はい」

夜になってもメールの更新ボタンを押し続ける朝紀。

○実家・縁側（夜）

朝紀「何日も、何日もそうやってるとさ。何に対して、どう向き合っていいか分からなくなちゃって」

直紀「……」

朝紀「進んでるはずだったのになあ」

直紀「進んでなかった？」

朝紀「うん。なんか、ふと足元見たらずっと同じところで足踏みしてた」

直紀「……」

朝紀「足踏みしているところがさ、だんだん汚くなって、もう元の綺麗な道には戻せなくなって」

直紀「戻す必要ないんじゃないか」

朝紀「俺の向き合い方がダメだったのかもしれないし、もっとやり方があったのかもしれない」

直紀「辞めることで一歩踏み出したんだな」

朝紀「えっ？」

直紀「その場で沈まなくて良かったよ」

朝紀「……！」

直紀「親としてはな。一歩踏み出したんだから足元も綺麗にしなくていいよ」

微笑みながら、朝紀にお酒をつぐ直紀。

朝紀「これからはもっと頑張るから」

直紀「別に朝紀は頑張れない奴じゃないから。それは、俺と母さんが一番知ってる。だから、朝紀が無理して頑張らなくていいところで、しんどくない範囲で生きてくれれば、それでいいんだよ」

朝紀「それだけでいいの？」

直紀「それだけで十分すぎる」

朝紀「でも、母さんに怒られるよ」

直紀「そんな事ないよ。見てみろ」

視線の先には、台所で香夜と楽しそうに話す香穂。

直紀「朝紀と香夜が、久しぶりに帰ってきて嬉しそうだろ？」

朝紀「確かに、香夜も楽しそう」

直紀「こうやって、たまに家に帰ってきてご飯を一緒に食べる」

お酒をぐっと飲み干し呟く直紀。

朝紀「それは、俺も出来る」

○同・寝室（夜）

横並びで仰向けで寝る朝紀と香夜。

香夜「オムライス美味しかったね」

朝紀「うん。美味しかった。本当に美味しかった」

○朝紀の家（日替わり）

パソコンで仕事を探す朝紀。

職種の欄に「営業」と打つが、すぐに消す。

少し考え「販売」と打つが、すぐに消し、今度は「事務」と打つがすぐに消す。

朝紀「何がしたいんだ」

ボーッと天井を見つめる朝紀。

朝紀「何ができるんだ」

朝紀の携帯が鳴る。

画面には「隆」の文字。

朝紀「もしもし」

隆一の声「朝紀？明日ひま？」

朝紀「忙しい日なんて無いよ」

○隆一の会社

隆一「明日さ、野球部で集まるんだよ」

（以下、カットバック）

パソコン画面の転職サイトのページが目に入る

朝紀。

朝紀「気まずいな」

隆一「ん？何が気まずい？」

朝紀「……俺、やっぱり明日はやめとくわ」

隆一「暇なんだろ？」

朝紀「忙しいんだよ」

隆一「忙しい日はないんだろ？」

朝紀「そんなこと言ったっけ？」

とぼける朝紀。

隆一「いいから来いよ？キャプテンが居ないと始まらないから」

一方的に電話を切る隆一。

朝紀「隆！ちょっと待って！切れたーー」

パソコン画面を見つめる朝紀。

○隆一の会社

電話を切る隆一。

隆一「こういうときは人に会った方がいいんだよ」

○居酒屋（夜）

仕事終わりにスーツ姿で集まる高校時代の野球部。

その中に同級生の伊藤海（22）も居る。

スーツ姿で入ってくる隆一。

海「おー隆！」

隆一「おー久しぶり」

隆一の周りに同級生が集まってくる。
野球部時代の話に花が咲くが、少しずつ仕事の話に移行していく。

×　×　×

私服姿で遅れて入ってくる朝紀。
朝紀を見た瞬間、会話が止まる。
周りを見渡す朝紀。
朝紀以外スーツ姿の同級生。

海「今日仕事休み？」
朝紀「えーと……」
心配そうな隆一。
朝紀「俺、仕事辞めちゃいましたっ」
無理に笑顔を作る朝紀。
静まり返る居酒屋。
同級生たち「……」
駆け寄る隆一。
隆一「こいつ、仕事辞めたこと気にして今日、参加するか迷ってたんだよ」
朝紀「ははは―」
隆一「ははは―」
無理に笑う朝紀と隆一。
沈黙が続く居酒屋。
どうしたらいいか分からず顔を見合わせてしまう朝紀と隆一。

海「なんだ、そんなこと気にしてたのか？」
朝紀「え？」
海「別に仕事辞めたぐらいで、朝紀の価値は変わんないよ？」
「そうだよ！」「気にしすぎだ」と口々にガヤを入れる同級生たち。
隆一「だよな！」
海「ほら、一緒に飲もう」
隆一が朝紀を連れ、輪の中に入っていく。

○居酒屋からの帰り道（夜）
並んで歩く朝紀、隆一、海。
海「みんな元気そうだったな。朝紀も」
朝紀「辞めた理由とか聞かないの？」
隆一「聞いてほしい？」
朝紀「いや、そういうわけじゃないけど……」
隆一「？」
海「？」
朝紀「気い使われてるのかなって」
顔を見合わせる隆一と海。
海「違うよ。朝紀のことを知ってるから聞かないんだよ」
隆一「そうだね」
朝紀「？」

海「朝紀が辞めるって決断した覚悟とか重さとか、何となく分かるんだよな」

朝紀「え？」

海「朝紀が責任感が強いことなんて、目を瞑ってもみんな分かるんだよ」

隆一「俺も分かるね」

朝紀「！」

海「だから、キャプテンらしく堂々としとけよ」

背中をドンっと押し、前を歩き出す海。

隆一「胸張れよ！キャプテン」

背中をドンっと押し、前を歩き出す隆一。

○朝紀の家・玄関（朝）

香夜「私、行ってくるからね」

玄関に見送りに来る朝紀。

朝紀「はい、今日も気をつけて」

香夜「あ、そうだ」

朝紀「？」

香夜「今日、お父さんお昼に家に来るって」

朝紀「え？なんで？」

香夜「暇なんじゃない？」

朝紀「父さん公務員でしょ？」

香夜「今日、祝日だよ？」

カレンダーを見る朝紀。

朝紀「ほんとだ。じゃあ、なんで学校行くの？」
香夜「それは決まってるでしょ？」
朝紀「補習か？」
香夜「そうだよ！」
朝紀「なんで怒ってんだよ」
香夜「朝紀、モテないでしょ？」
朝紀「今、関係ないだろ。どうせ凪も一緒なんだろ？」
香夜「なんで分かるの？」
朝紀「だいたい分かるよ。早く行け」
香夜「はいはい。朝紀の悪口言いに行ってきます」
出ていく香夜。
朝紀「勉強しろよ、勉強！」

○同・リビング

ご飯を食べ終わりパソコンに向かい仕事を探す朝紀。
だが、検索欄に何も入れれない朝紀。
時間だけが経っていく。

×　×　×

インターホンが鳴る画面には父・直紀の顔。
解除ボタンを押す朝紀。

○同・玄関

ドアを開ける朝紀。
入ってくる直紀。手にはお酒。
朝紀「茨城から何もってきてんだよ」
お酒を朝紀に渡しリビングまで入ってくる直紀。

○同・リビング
直紀「こんな家なんだな。一度来て見たかったんだよ」
嬉しそうな直紀。
朝紀「二回目だよ」
直紀「そうだっけ？」
朝紀「もうお酒飲んでる？」
買ってきた、お酒を机に広げる直紀。
パソコンの画面が目に入る。
直紀「仕事探してるのか？」
朝紀「うん、まあね。香夜も居るし、ちゃんとしないとね」
直紀「とりあえず一杯飲むか」

×　×　×

ベランダに繋がるドアを開け、風を感じながらお酒を飲む二人。
直紀「昼に飲む酒ってなんでこんなに美味いんだろうな？」

朝紀「仕事してなくても酒は美味いんだな」
直紀「いつ飲んでも美味いんだよ」
朝紀「……ちゃんとしなきゃって思ってる」
直紀「？」
朝紀「ちゃんとしたいとも思ってるんだけど」
直紀「うん」
朝紀「でも……正直、よく分からないんだよね」
静かに聞く直紀。
朝紀「あーグダグダうるさいな。俺」
直紀「……」
朝紀「……」
直紀「何かになろうとしなくていいからな」
朝紀「え？」
直紀「朝紀も香夜も、父さんたちにとっては特別なんだから」
朝紀「……そっか。そうだよね」

○駅の改札（夕）
駅まで直紀を送る朝紀。
改札を通る直紀が振り返る。
直紀「ちゃんとご飯食えよー！」
朝紀「うん！ありがとう」

○家までの帰り道（夕）

横断歩道で止まる朝紀。
信号は赤。
数十秒後、青に変わる。
歩き出す朝紀。

○朝紀の家（夜）
香夜「ただいまー」
朝紀「おかえり。カレー食べる？」
香夜「食べる」
カレーを温める朝紀。
香夜「お父さん帰ったの？」
朝紀「うん、カレー作ったら満足して帰った」
香夜「何それ」
朝紀「分からないけど、美味いよ」
いつもより楽しそうな朝紀。
香夜「キモいよ」
朝紀「は？何が？」
香夜「その笑顔が」
朝紀「俺のかっこいい瞬間とかないわけ？」
香夜「ずっと一緒にいるけど、ずっと無い」
朝紀「え？ずっと？探して！今すぐ！」
香夜「うるさいなー」
そんな朝紀を見てどこか嬉しそうな香夜。
香夜「でも」

朝紀「？」

香夜「いつもよりは良い顔なんじゃない？」

朝紀「……決めたんだ」

香夜「何を？」

朝紀「無理しないって」

香夜「そっか」

朝紀「それだけ？」

香夜「何か言ってほしいの？」

朝紀「いちいちだな、お前ほんといちいちだな」

止まっていた手を動かしカレーを盛る朝紀。

香夜「いいと思うよ」

朝紀「え？」

思わず手が止まる朝紀。

香夜「無理することが頑張ってることじゃないと思うから」

振り向く朝紀。

朝紀「やっぱり、お前良いこと言うな」

香夜「気づいてる？お前って言うの二回目だからね？」

朝紀「細かいな」

呟く朝紀。

香夜「え？可愛いな？」

朝紀「どんな聞き間違いだよ」

香夜「手動かしてもらっていいですか？」

朝紀「口閉じてもらっても良いですか？」

×　×　×

温めたカレーを机に置く朝紀。

二人の目の前には二つのカレー。

朝紀・香夜「いただきます！」

カレーのご飯と、ルーをぐちゃぐちゃに混ぜる二人。

○公園（日替わり）

コロッケを食べる朝紀。

隆一「美味そう」

朝紀の隣に座る隆一。

隆一「それ、美味いよな」

朝紀「知ってる？」

隆一「凪沙から聞いた」

朝紀「妹からか」

隆一「香夜ちゃんに勧められたみたい」

朝紀「昔4人でよく遊んだもんな」

隆一「朝紀が泣いてたのなんだっけ？」

朝紀「キャンプ？」

隆一「そう！それだ！」

朝紀「俺、泣いてたっけ？」

とぼける朝紀。

隆一「朝紀しかいないだろ？怪我してたの香夜ちゃんなんだから」

○回想／キャンプ場（夕）

河原で足を痛める香夜（１０）

それを心配そうに見つめる朝喜（１５）。

隆一（１５）凪沙（１０）も居る。

朝紀Ｎ「あいつさ、自分が痛いはずなのに笑ってたんだよ」

周りに心配かけないように笑う香夜。

○公園

朝紀「それ見てさ、なんだか悲しくなちゃって。そんなに無理すんな。そんなに頑張るな……って。」

隆一「……」

朝紀「俺たちのために笑ってくれてるのにな。でも俺には、それが、どうしても苦しく見えたんだよ」

隆一「朝紀も一緒だよ」

朝紀「え？」

隆一「朝紀は香夜ちゃんより、隠すの何倍も下手だから」

朝紀「そう？」

隆一「辛い顔、全然隠せてなかった」

朝紀「……」

隆一「気づいてないかもしれないけど、朝紀と同じぐらい、香夜ちゃんも朝紀のこと大切に思ってるよ」

○回想／会社へ続く道（朝）

歩いている隆一。

携帯が鳴る画面には『香夜ちゃん』の文字。

隆一「もしもし？」

○回想／学校へ続く道（朝）

登校する二人。

香夜「もしもし、隆？」

凪沙「香夜も呼び捨てじゃん」

呟く凪沙。

隆一の声「ん？どうしたの？」

香夜「最近、朝紀に会った？」

（以下、カットバック）

隆一「この前、公園で会ったよ」

香夜「朝紀、最近変な顔だから……」

隆一「ははは！なんだよ、変な顔って」

つい笑ってしまう隆一。

香夜「大丈夫じゃない顔してる」

隆一「大丈夫じゃない顔？」

香夜「だから、あんまり良い顔してないってこと」

隆一「いつもだろ？」

香夜「いつもだけど」

隆一「？」

香夜「いつもだけど……今回はいつもと違うから」

隆一「……」

香夜「……」

隆一「ごめんごめん、分かってるよ」

香夜「！」

隆一「俺ができることすれば良いんだろ？」

香夜「……うん」

隆一「凪沙近くにいる？」

香夜「居るよ」

隆一「凪沙に伝えといて」

○回想／学校へ続く道（朝）

香夜「うん、分かった」

電話を切る香夜。

凪沙「なんて？」

香夜「勉強しろ！だって」

凪沙「朝も言われたんだけど」

香夜「どこの、お兄ちゃんも言うこと一緒だね」

どこか嬉しそうな二人が歩き出す。

○回想／会社へ続く道（朝）

隆一「あそこの兄弟は二人とも手がかかるな」

まんざらでもない表情で歩き出す隆一。

○公園（夕）

隆一「俺も心配してたけど、想いの強さは香夜ちゃんに負けるな」

朝紀「最近、香夜の一言一言がストンって腑に落ちることが多くて」

隆一「当たり前だろ」

朝紀「？」

隆一「誰よりも近くに居て、誰よりも朝紀のこと見ていたの、香夜ちゃんだからね」

朝紀「……そうだよな」

隆一「気づくの遅いよ」

朝紀「俺さ、仕事してる時も、辞めた後も苦しかったんだけど、辞めたこと自体には後悔してないんだ」

隆一「そっか」

朝紀「コロッケ食べて美味しいな。とか縁側で飲む酒うまいなとか。些細なことだけど、その一つ一つに目を向けられる今が好きで」

隆一「うん、良い顔になってきてるよ」

そっと背中に手を当てる隆一。

×　×　×

フラッシュ

朝紀の家（夜）

朝紀の背中を強く叩く香夜の手元。

実家・玄関（夜）

朝紀の背中をポンと押す香夜の手元。

実家・リビング（夜）

朝紀の背中をそっとさする父の手元。

居酒屋からの帰り道（夜）

背中をドンっと押す海の手元。

背中をドンっと押す隆一の手元。

×　×　×

○戻って公園（夕）

背中を手で一番強く押す隆一の手元。

背中に熱を感じる朝紀。

立ち上がり歩き出す二人。

○道（夕）

横断歩道に差し掛かる二人。

横断歩道の信号が赤から青に変わる。

信号を見つめ、横断歩道の手前で一度立ち止まる朝紀。

横断歩道を渡る隆一。

朝紀が来ていないことに気づき、横断歩道の途中で振り返る隆一。

隆一「朝紀？」

呼ばれて、急いで横断歩道を渡る朝紀。

○キャンプ場（日替わり）

肉を焼く朝紀と隆一。

近くの川で魚を釣る香夜と凪沙。

朝紀「怪我するなよー！」

凪沙「また朝紀が泣いちゃうからね」

朝紀「またってなんだよ」

香夜「今度は、ちゃんと見えるように泣いてね」

朝紀「泣いてないし、泣かないし」

隆一「それを写真に撮るのが俺の仕事ね」

朝紀「いらないから、その仕事！」

香夜「いらない仕事なんて無いよ」

凪沙「香夜……いいこと言う！」

朝紀「もういいから、肉食え！肉！」

楽しそうにキャンプを続ける4人。

（終）